

令和6年10月2日（水）

皆さん、おはようございます。

はじめに、この9月から1年6組で学んでいる留学生を紹介します。

<Ta Nguyen Khanh Chi（タ・グエン・カイン・チー）さんの自己紹介>

今日から後期が始まります。前期の振り返りを踏まえて後期のスタートを切ってほしい、一人ひとりが「目指すもの」に到達できるようになってほしい、と願う節目の時です。この節目に、私から話をさせてもらいます。

今年の夏は、フランスのパリでオリンピックが行われました。

TEAM JAPAN は、素晴らしい成績を収めた種目もあれば、人々の期待通りにいかなかった種目もありました。選手の成績や振る舞いに対する人々の厳しい声がSNSを賑わせるという点でも注目された大会でした。

メディアで多く取り上げられた種目の一つに、男子体操がありました。男子体操が団体で金メダルを獲得したことは、皆さんの記憶にも残っていると思います。大会後、選手たちは、多くのテレビ番組等に登場し、いろいろなことを話していました。その中で、私の印象に残った3つのことを話します。

それは、「繋ぐ」「手が伸びる」「フィニッシュで型にはめる」という3つです。

まず、「繋ぐ」について話します。

皆さんご存知のとおり、男子体操チームは、大逆転で団体の金メダルを獲得しました。途中で失敗する選手が出たり劣勢であったりする中でも、「絶対にあきらめるなよ」という声を掛け合いながら最後まで頑張り抜きました。杉野正堯選手は、「思い続ける力、あきらめない力、そして信じる力。このチームには、それがすべて揃っていた。」と述べています。チーム内でお互いを信じ、思いを繋ぐ。これまでの先輩たちから受け継いだものを磨いて、繋ぐ。周囲で支えてくれる人たちの気持ちを受け止め、繋ぐ。皆さんとともに、この「繋ぐ」という言葉を大切にしたいと思います。

2つめの「手が伸びる」についてです。これも杉野選手があるテレビ番組で語っていたことです。本番の演技中、鉄棒の回転技をしているとき「やばい」と思う瞬間に、普段よりも手が伸びて鉄棒に手が届くことがあるそうです。一緒にインタビューを受けていた岡慎之助選手も「本当です」と強調していました。普段からこれ以上できないというくらいに一生懸命に努力していると、本番で予想以上の力を発揮することがある、と言われることがあります。杉野選手や岡選手にとっては、「手が伸びる」のがまさにその瞬間なのだと思います。皆さんも、自分の目指す分野で努力を重ねていけば、「手が伸びる」瞬間が訪れる可能性が高まるのではないのでしょうか。

3つめは、「型にはめる」です。体操では最後のフィニッシュが重要なポイントですが、選手たちの頭の中には透明な型のようなものがイメージされていて、そこに自分の体をはめ込むように最後の演技を行うとのことでした。フィニッシュをイメージしたとおりにするために、それまでの演技の一つ一つを丁寧に重ねていくことが重要であると、私は解釈しました。皆さんも、学習や部活動等で様々な目標を持って取り組んでいると思いますが、体操選手が言う「フィニッシュの型」というイメージが何かの役に立てばと思います。

以前から、私は皆さんに、将来の目標（実現したいこと、叶えたい夢など）を持ってほしいとお話ししています。その目標は、人と同じである必要はなく、むしろ違って当然です。どのような夢であっても、それを実現するためには、様々な人との「繋がり」、「手が伸びる」瞬間につながる努力、そして「フィニッシュの型」が不可欠なのではないかと思ひ、先ほどのような話をさせてもらいました。参考にしていれば、幸いです。

最後に、もう一つ。

9月4日、私は石川県立輪島高校にお邪魔しました。学校祭（文化祭）の様子を見させていただくためです。

輪島高校の敷地は所々に大きなひび割れが残り、校舎は傾き、グラウンドや体育館は使用不可能なままで、学校としての完全な機能回復までには相当の時間が必要と感じました。

輪島高校の校長先生の案内で輪島市内を回ると、崩れた家屋、傾いた電柱などはそのまま。輪島朝市があったエリアの取り壊し工事が進んでいました。

輪島高校の文化祭は、教室での展示や演奏、中庭に特設ステージを作った発表等、様々な制約を受ける中で行われていました。ですが、生徒の皆さんはとても前向きにそれぞれの活動に参加していましたし、それを支える先生方や保護者の皆さん、地域の方々、さらには県外から支援に来られている方たちがたくさんおられました。

輪島高校の校長先生は、「建物の改修や町の復興には時間がかかり、そのうちに人が離れていってしまうかもしれない。そうならないために、生徒たちのアイデアで新しい町づくりが実現するようにしたい。」とおっしゃっていました。

訪問直後に私が抱いた思いは、「学校教育を通じて未来社会の創り手を育成することが、ひいては将来の地域の復興・発展につながるはずだ。できれば、能登の生徒と高志の生徒（福井の生徒）との繋がりを生みたい。」ということです。

その後、9月21日から23日にかけて起こった豪雨で、再び大きな被害を受けてしまった能登地方の皆さんに今何ができるかという、個人でできることには限りがあるようにも感じますが、これからも常に心に留めておきたいと思っています。

皆さんも、自分のことを大切にしながらも、周囲の人たちや他の地域に暮らす人々の状況や思いなどを想像力を働かせて捉え、できることややりたいことがあれば行動に移してもらえればと思います。

それでは、今日から始まる後期も、みなさんが意欲に満ちた学校生活を送れるようにと期待して、私の話を終わります。